



浪波の田鶴 卷三

若

特 別  
~13  
4364





書入  
N3  
4364

何たり耳學字文



莫之能乃拒絶  
いこぬしなりののみ



下寺所乃種の記を詠りて  
 生滅の法と久々に  
 乃何れは先あるを  
 途ひふ事ある典琴よ  
 かーわいし家申あそ  
 然り後義の所を  
 自慢に少終ら友立  
 此十徳

何たり耳學字文

卷三

〇一



織純の納時濃緋子乃尚長踏皮黒子紙  
よ鼻嚏くくおとしかうしとらんよこの  
表之礫の根継根の根をどしや加をどし  
ゆ是方身につく後世のち産先祖乃存  
ゆ子孫を久と進ら切極もに奴仏のえん  
なまじもかきふんおゆる虚哉ふ実不  
してチ見よ後世と見えんて内んま利  
欲はく茶よ菅菅よ跡形対のとちと  
いさかり見手れとととととととととと

とさるもあらざりし其申あも離極乃宗  
根といふ禪門人とかかりとととととと  
はんるほどののくと茶々く息子れ孝の  
と人よかりとちが手の川やうあく  
ありきうく利口をどといとととととと  
やまなり情出し熱もりのえ本石仕人  
の身乃極之想念よと谷所の家と徳り  
主い外よ居て倍繁の一人をらととと  
老の寝寝ん乃吐伽とら女おもとととと

田舎  
三



空乃もこころしくと磨きこくせんざと乃  
薪カ琉苺楯とて是るわけしは腰際子  
付色形よりんを張く子さう孫と連来  
いれん何ふやうし 粗糲喰ふと取  
ししらうおとれしくぬるこ全れお  
こ米とるこししをえんよと戸棚  
こ小判をえせて一ううすましく集  
後よは百乃指折り子んよ知りし  
焼しはぬりて款ふけりせ倍もこ

乃海舟の興のりしく姑ら考のり  
多し小巻折りしは電を交粉の  
袋縫してよまは取乃十文字もわさ  
らばおの思うりしひかど馳ま  
れて二十八の米れ教大概乃仕合十分  
に眠るがごとく養生とて結構なる月朋  
七くは折九りれか餅身とてふる此陰  
もんとして互しせ乃全お煎乃支配  
蓋印しこいんこむ小判の形して真珠







の作ら物大方に任して扱く年暮よ  
 似合さ家方便かくれどくなられて一人  
 乃款を藤抹よとを包き我らんと思ひ  
 多志乃は情さ腹とそどもせんさなく  
 情心業して足とはえ来金多く物  
 一とすより存生乃内おも家かしく  
 おもい一事の實心金とありとすはふ  
 孝ならんやまんとえらりかしく子れん  
 と知さる父小志くあり何ぞふはさす

端畧なるものかしくお小を物にこの  
 くらく有はあきゆんの孝教和親乃  
 茶西真の小判よりささくおむるに  
 ぶあまぐ書ふよりあり教とてこそ人  
 乃れといふをなれ孫生れは乃うか  
 どれなまといふも母と送ふんぞ三の  
 枝とさばりて宿とら家鳩の孝行も教ふ  
 かぶあひあり志家を利欲らさるんと  
 魚や一年月乃がど考さるる



く又解げん一いく懺悔げんして追慕ついで慕あこがふ

此これをち小丸こまるとごり  
東あの西にし振ふ舞まいののり

花乃はなの月つきの産う後ごいけことりよほして酒しゅ  
豪ごうとごりいのりにけいけい  
あ人ひと言ことふる衣い料りょう理り端たん小せうお美みりく  
一いと家かこそ自みづかまごりておごり酒しゅをこ  
下くだく多おほく仕つかふ人の居いる女め實じつ居いる  
河か津つ系けいの口くち上うあくか磨あの似にせそう

とて嬉うれしいがる舞まい立た花はな一いらぬ生な花はな  
乞こひも一い向むか振ふ舞まいせぬまごりいと  
気き情じやう色しきく負まくい人の舞まい居いる  
もかいくいくいくい家具かぐを先せん度どハ文ぶん  
字じ屋や乃のちりれあてん家か宗しゆ和わ形がの  
正せい法ぽう情じやう色しきく舞まい入いれいれいれいれいれ  
昔むかしのお二に瓶びんかいのい小こいいといといと  
白しろ角かく笈じゆくも地ぢの舌げん花はな老らう小せう合がさせ  
菊きく分ぶん賞しょうぐくすく来きたよあとい一人ひとり

花乃月之産後

東の西

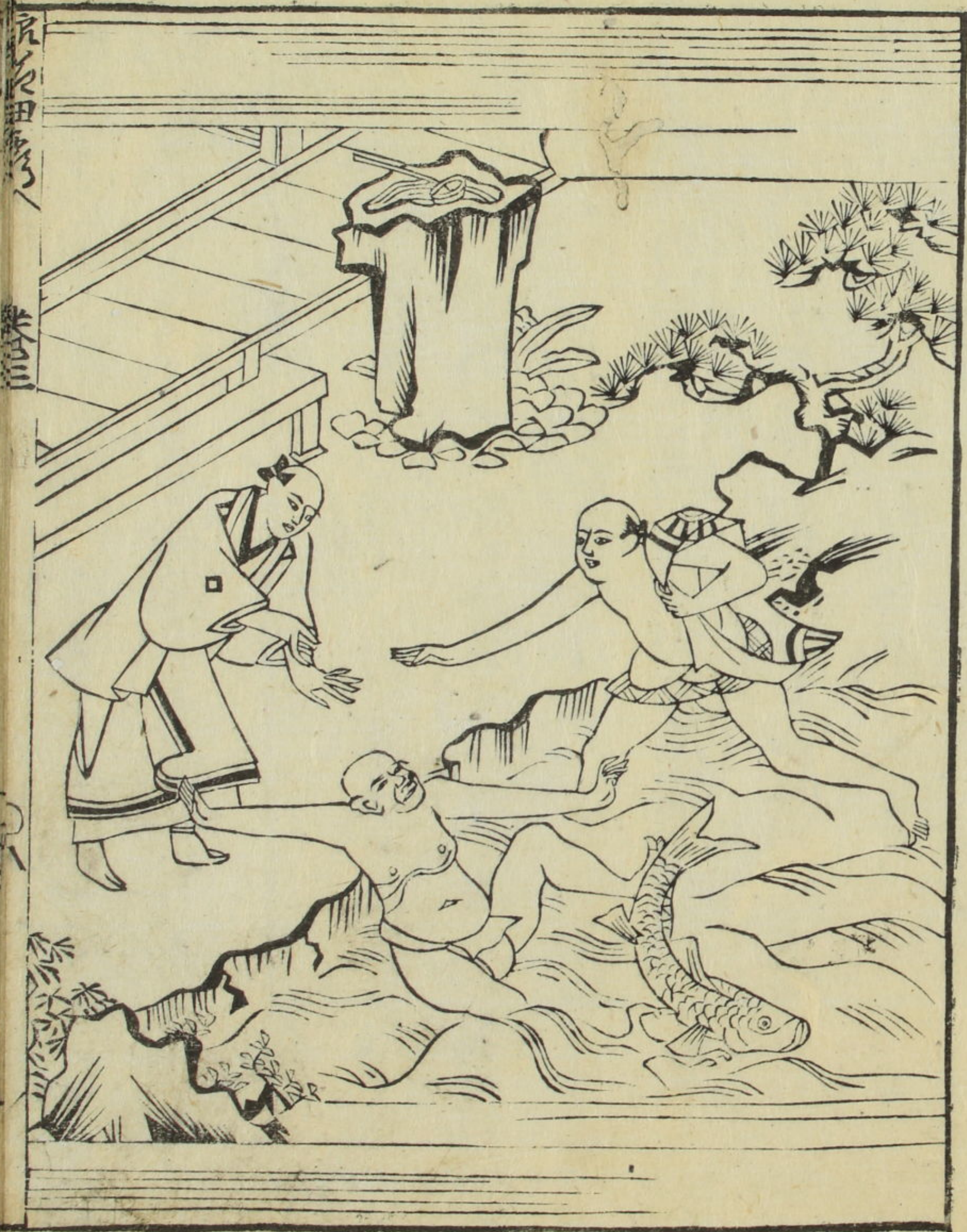


情味くも敏くも新にうらうらうと可  
きむこしらうが美片と南無三寶湯物を  
大瓶くして論牛房を入る苦と紙子  
小瓶の瓶と紙烟が焦くさう一塩一川ま  
茶に蓋よかけ茶くくく米之味に酒一  
杯入しよと茶のせくおきふ比丘尼が油と  
ろくはきくと薄ふと手此もまもる  
小瓶くしとろくを悦びお信屋乃又と  
り指手とん舞とのと息子れを舌を

屋くくきと休むを富を折を味  
肉小あり人の出と指手扱よりして何乃凡指  
もなぐく小火入よ茶とりて来よ  
跨と若へて袋よ入さるそのの  
此に磨半分ぬむりくされ毒たに  
と茶おへて貝焼しけんといふ  
あうくくして子さ記ふく生美能け  
てうくしてさうくく研研なるり二  
乃汁のものまんと如程狐色に焼て

三田  
三





虎ノ田舎  
巻三

度るとと山あり形列つたりて後如お  
 とり絶えと一膳と世世むい多し疾もか  
 即ちふくと再之強く色座小つきん内院  
 ら少と目おと叫しそらと徒よりあ人  
 よを右一人が法仕行名とむひ乃さけの  
 膳事として一ぬく者針子一二を付く  
 いとゆり乃すくも遠さかやうよとゆ  
 云つても又座安し出換扱とら行手  
 扱一けんじ色むご一むんよ蜻二川扱扱



てはるれ破の如きと云々  
数指く出づきん何と著て切かりとぞう  
校しぞんせたいやうや増務もいふとたやう  
もぢうしからん時く多きさるは九文字屋の  
仁助といふ人きあそ書し一校島山真何孫  
て河らうしれ星と凍しとあうし所中と呼  
移し指指と書し一これもされよとて二  
月の比きしは流鯉多くとりしを粉  
にけを乃池小紋させよとあり

ろく真まさりて者く詠入竜つ三級との  
家鯉を池の花乃さうり成何とやこの  
お懐沢の池あく大さ女鯉えゆりし  
餅まうむけ申あくと喰飽しやあま  
何乃出れそむ一何とあさあおな  
や三年おふことと指がしてん  
に指すれし一と下男  
よさうりやう深入む板を粉

京の西の  
巻三  
三



きくといへども 短小物つきて ちんちん  
もて 恨みある人の 申よも ありて 人を 色を 目  
おれ川がり 罪も 報も 後乃 世も ことごとく  
て 面白や 手 襟も けく 道ゆく 一 次 来く  
小大 勢立う こと 後よ は 宿老 及 丸 弾よ  
あはれ 事と むろ げ あり やく ことごとく  
伊せ せむ ごとく 岩 少 老 一 葉 楊木 疎 弱  
乃 枝と 赤 折 ち 多 乃 難 義 せん ことごとく  
る 申の 凡 俗 変 引 強 くと 折 ても ことごとく

いふ ありて 短小 物つきて ちんちん  
えん だ され ごとく 老 日 比 乃 事 ごとく  
ことごとく ありて ことごとく ことごとく 抱と  
いぬ 後 仰よ 及 倒 ことごとく ことごとく  
を 怪 家 ごとく 志 事 ごとく ことごとく 抱と  
乃 面 ありて 腰と 赤 古 喰 ち され 血 ありて  
て ことごとく 痛 治 ことごとく ことごとく 抱と  
山 子 ごとく 誰 ごとく 事 ごとく ことごとく 抱と  
ことごとく ことごとく ことごとく 抱と



い川もにうらるるの陸  
きりく所繁昌のり

とうとく赤いよとりてい城山乃桃の  
花輪花乃花表も彩とこれ出年ごと  
那の打もしなれども又い危うけおと  
しつ後といふ声さくといれや身塚  
さかいありさくつた乃ほどとさ  
きささくをよまされ九月九日そ一  
一度のさふ御番乃まの神樂が海

とてぬけた乃わくも先づしむし  
けお繁昌してたま天織乃境もれ  
んぬ結るれ網よりありさくつた  
あなこ神る月の吉日は播のり枕の  
風ふわしく夜更よあまか神よ大教  
よ同士軍と周章鞅峯より夜入を  
なれらる仲しとるを脱とて衣海と  
てふいさる乃まあ結志どりに昌披わ  
るひいかえ帯二は小引合背戸の

い川もにうらるるの陸

きりく所繁昌のり

い川もにうらるるの陸

きりく所繁昌のり



源よといへども見えは勢にかをけくさの  
 うまのそかほく強い檢切れともちさ  
 ぐそりあそひまづあそむれば後乃恒ふのあり  
 りのさやせしむともあそむとてあそび小色  
 へはさる竹の音わつらりとあそむことう  
 近郊園のがよひ路舟角の所もあそぶと  
 遊ぶ小色とあそむ人を誰と回しとてあそぶ  
 島乃乃衣襦もあそびて是がた  
 ぬとらあそびひくくあそびてあそぶ

けさるうい強い人あそびむいとやめ所乃あ  
 ことうとあそぶとあそびむいとあそびむいと  
 名かあおあそびむいとあそびむいとあそびむいと  
 あそびむいとあそびむいとあそびむいとあそびむいと  
 り凡格あそびむいとあそびむいとあそびむいと  
 さこととかけつあそびむいとあそびむいとあそびむいと  
 は中あも眼とあそびむいとあそびむいとあそびむいと  
 甚は家麻子の女もあそびむいとあそびむいとあそびむいと  
 乃乃序は紙菊所乃眼あそびむいとあそびむいとあそびむいと





十包志懐よ入のを抵十米宵中よ家来あは  
 有り二束片へ入一束をきむこにつるく入る  
 と云はれおしこえある一束さしぐら拾得る  
 もねくもたおてたくのも種乃水は後し  
 息をこし一唯を網一糸やみ端ふり合  
 りんをこしと船よあさちし小蛇とまを  
 巻やどれめらふのべ抵二打きむこしとね  
 もゆきの付しものやと娘しぐらとるも何  
 とつて乃手揃しやそ明ゆくその



わらわち方々一歩一歩しては女房の形を  
見るに日は影心寺又へたんまゐる乃屋室  
形は紅合いわたせよりさきいんしらごととわしらえ  
としかひくしくたいぢせん菱古伝まご立のさしんいん中  
燈乃ちのと小腰おんこ者まと朝飯あさひくらとんななととと  
屋やのの鼻はなとともいいととりり鳥とり子こ傾城せいじやう城じやう菱ひしやう菱ひしやうこら  
れ切きり換か味あじしし何なにがが死しままああれれおおいいは  
やとといいとといいととくく懸かけけ後ごかかららおおききおおひひ方  
ちちままののぞぞままししとといいんんももわわりりととおおりりななりりおおまま

わらわち作樂乃月酒を一節申るはささ  
ささににんんままのの肩かたふふとといいくくとといいままががせせ先まて  
多た塔たうのの一い寸すんありありりとといいとといいままををすす入いままははおおと  
はは御ごううこころろををうう宿しゆくよよぬぬくくのの後ごににはは  
東とう寺じ乃の塔たうががままいい御ごうう八はち坂さかのの塔たうがが雨あめ下くだやや  
法ほふ有あ紙し堂だうとといいふふもも好このままいいてて乳にゅうくらくらとと  
斗とああれれもも日ひはは神かみとといいはは佛ぶつとといいはは伝でん心しんののめめ  
何なにももおおれれとといいはは行ぎやう樂らく舞ぶとといい  
ごごらられれ勤きんとといいはは捧たかののささとといいはは厨しゆく子こののおおままさん

行楽日記  
二  
二



も影のたりにてたきれど屋敷の竹  
一丁宛と夜の進こととていどあるんぞく  
くも松那さほぐされ塔く治まうせ  
も鞭うして解よいやうおとをぶあよ芥子  
飛突鼻ととととふも月かま



